高原野菜産地を訪ねて

南国市南部露地野菜生産グループ

代表　山岡　益喜

ふるさと創生基金を活用して『ふるさと見聞録』が実施されています。広報ではこの事業を利用した皆さんのレポートを随時紹介していきます。

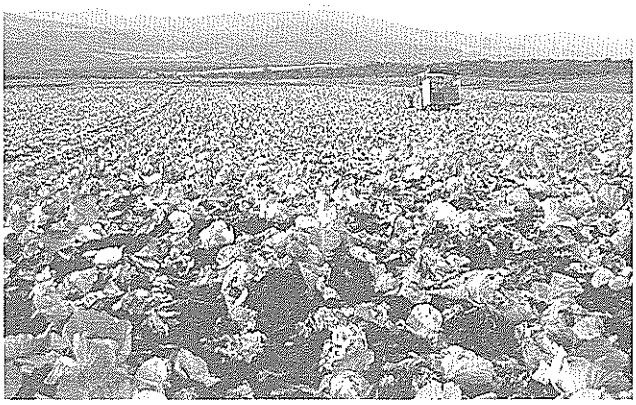
現在の厳しい農業情勢の中で、地域農業を産業として成り立て、後継者に継承していくためには、新たな作物の導入、基盤整備など、多方面へのアプローチが必要となっています。

そこで、私たち九名は十月二日から四日にかけて、高原野菜で有名な群馬県嬬恋村、長野県南牧村へ

①国営・県営開拓パイロット農業で造成した耕地でのキャベツ、レタス、白菜の集団栽培、大型・小型機械とを組み合わせた省力栽培

②農業中心の指導のもとでの、野菜の計画生産と共販体制、予冷施設の有効利用と産地の活性化、畜産農家の結びつきによる輪作体系の確立と、有機質確保のための土づくり

の視察研修を行いました。



群馬県嬬恋村のキャベツほ場

これらの地域は、第一に経営規模が大きく、一戸あたりの作付面積が約五㌶であり、嬬恋村ではキャベツの専作経営が多く、南牧村では白菜＋白菜等の二毛作が多いようです。また、農家は約八〇馬力の大型トラクターを三台所有し、耕転、薬剤散布、収穫出荷とそれぞれに使い分けしています。

また、国や県の補助事業を導入し、農地造成、ほ場整備、集出荷施設、予冷施設を整備しており、さらに今後へと農地造成計画（国営農地）等が進行しつつあります。

そして、夏は農作業、冬はスキー場の仕事があるため専業率は三八㌫と高く、農業後継者が残っています。

私たちの南国市南部農業地帯は、自然条件に恵まれ、これまで早生稲や野菜を栽培してきましたが、農業を取り巻く環境が厳しくなるとともに農業後継者が少なくなっています。その上、南国市のほ場整備率は、県下でも最低のわずか二・八㌫であり、南部地帯の水田は湿田、半湿田が多く、このことを改善するためには、ほ場整備を行い、いつでも、何でも作れるほ場にする必要があります。

研修先の概要

群馬県吾妻郡嬬恋村

耕地の標高は七〇〇～一、四〇〇㍍のところにあり、その面積は、約三、七八〇㌶で九〇㌫以上が畑であり、そのほとんどが露地野菜である。農家戸数は一千百五十九戸で、専業四百三十六戸、第一種兼業二百八十九戸、第二種兼業四百三十四戸であり専業率は三八㌫と非常に高い。また、経営規模別農家数は五㌶以上が百七十七戸、三～五㌶が三百三十九戸等となっており、専業農家の平均は四・五㌶である。農産物の粗生産額（昭和六十二年）は、総額百二十三億九千四百万円であり、そのなかで野菜百十二億五千八百万円、芋類三億六千百万円、牛乳三億一千四百万円等となっている。

国営および県営パイロット事業は、昭和四十五年から始まり、これまでに約八五〇㌶の農地が造成され、今後七〇〇㌶が計画実施される予定である。キャベツ栽培は明治の末に試作され、昭和の初めに穀物中心から野菜専業へと移り、昭和九年ころにはキャベツが約二八㌶作付けされた。昭和四十年には一、一三五㌶となり、同四十一年に野菜指定産地（夏秋キャベツ）の指定を受けた。そして、六十年には村独自の野菜生産安定基